

Ⅶ. これからの人材の育成への提言

3. 日本がん看護学会

小松 浩子* 佐藤 禮子**

(聖路加看護大学*, 放送大学**)

はじめに

緩和ケアの目指すところは、人々の苦痛からの解放とかけがえのない尊い存在としての日々を支えることにあるだろう。日本がん看護学会では、①がん患者の緩和ケアを担う看護専門職者の智と技を学術的に集積すること、②緩和ケアに貢献できる看護専門職者のキャリアアップを組織的に支援すること、に取り組んできた。これらの活動について、以下に示した4つの視点から説明する。

智と技を研鑽する学術集会：多様ながん看護セミナーの開催

学術集会および学会誌発行は、学会が誕生してから21年間、脈々と続けられてきており、そこには、緩和ケアの智と技が豊富に集積され、それらは会員のほか多方面の人々が活用している。がん看護、緩和ケアの領域に含まれる知識や技術は、日々刻々と発展を遂げている。これらの知識・技術を確かなものとして、いち早く獲得し、傍らで苦しんでいる人々のケアに活かすことが求められている。

本学会では、学術集会と並行して、多様な形態のがん看護セミナーを企画し、学会員をはじめ、学術集会に集う看護専門職者に最新の知見を学ぶ機会を提供している。表1に2005年度に企画したセミナーを示した。

セミナー参加者には、取得単位を明示した修了証を発行し、専門能力のキャリアアップに関する動機づけを高めるとともに、認定看護師などの認定更新への単位取得を支援している。

認定看護師ならびにがん看護専門看護師の誕生と継続的なキャリアアップ支援

日本がん看護学会は、日本看護協会による認定看護師制度が始まった初期より、がん看護専門領域における認定看護師の誕生と継続教育を学会教育研究活動委員会の重要な活動として位置づけ、専断的に取り組んできた。これまでに、〈がん化学療法看護認定看護師〉〈がん性疼痛看護認定看護師〉〈乳がん看護認定看護師〉の3分野について、期待される専門能力、教育目標、教育内容などを検討し、それぞれの認定看護師教育課程として看護協会に申請し、認定看護分野の特定につい

■表1 2005年度のがん看護セミナー

1. がん看護アドバンスセミナーの開催（会員を対象）
テーマ「エビデンスに基づいたがん化学療法看護実践へのチャレンジ」
2. 教育セミナーの開催（学術集会参加者を対象）
テーマ：1) がん疼痛緩和と看護師の役割
2) 抗がん剤投与のリスクリダクション—主要なレジメンと管理のポイント
3) 心と癒しの画像
4) 患者さんを中心としたがん化学療法
5) 乳がんの標準治療—よりよい乳がん治療のためのチームアプローチ
6) チーム医療における看護師の役割

て承認を得てきた。このほか〈ホスピスケア認定看護師〉についても、教育課程を作成し、看護協会へ認定看護分野特定について申請の手はずを整えていたが、この分野に関しては、ホスピスケア研究会において検討された教育課程が申請されたため、本学会からの申請は行わなかった。

現在、〈がん化学療法看護認定看護師〉〈がん性疼痛看護認定看護師〉が全国の病院でがん医療・緩和ケアを牽引する専門職として活躍していることは、多くの人々が認めるところである。また、これら認定看護師の活動の社会的有用性は、緩和ケアチーム保険点数加算、外来がん化学療法保険点数加算を得るうえで、これら認定看護師の配置の重要性が各施設に望まれていることから伺える。乳がん看護認定看護師は、認定教育が2005年度よりスタートしたばかりであるが、今後、乳がんチーム医療を推進するうえで、重要な役割を担うものと考えられる。

さらに、教育研究活動委員会では、2006年度より新たな認定看護分野として、〈放射線療法看護認定看護師〉の教育カリキュラム案の検討を開始する予定である。

がん看護専門看護師に関しては、その認定が日本看護協会ではじめられてから、現在（2005年12月現在）までに、58名が認定を受けている。がん看護専門看護師の教育は、看護系大学大学院が担っている。したがって、直接本学会が教育に関与することはないが、認定を受けたがん看護専門看護師のほとんどは、本学会の会員であり、学会発表、シンポジウム、教育セミナーにおいて重要な役割を發揮し、会員の専門性を底上げする良きモデルとして活躍している。

がん看護専門能力開発の地図づくり： がん看護コアカリキュラムの作成

がん看護学会は、わが国で唯一のがん看護専門学術団体として、がん看護に携わっている看護師の専門能力を開発するための継続教育に関する方向性を指し示していくという、大きな役割を担っている。2005年度より、がん看護専門能力開発の地図になるだろう〈がん看護コアカリキュラム

■表2 JSCN-SIGのテーマ

がん看護専門看護師、がん化学療法看護、がん性疼痛看護、ホスピスケア、乳がん看護、スキンケア、臨床試験看護師、リンパ浮腫ケア、血液・骨髄幹細胞移植看護、遺伝がん看護、がん放射線療法看護、外来がん看護、在宅がん看護、小児がん看護

作成）に具体的に着手している。現在、海外のがん看護学術団体が開発したがん看護コアカリキュラムの内容検討を行っている。これらに依拠しながら、わが国におけるがん看護コアカリキュラムの作成を目指している。

専門職としての関心の結集：それぞれが人材育成の原動力

がん看護のキャリア・アップの鍵は、専門職者としての関心である。学会がお膳立てした専門能力研鑽の機会ばかりでなく、専門的な関心を持ち寄り、切磋琢磨する仲間と忌憚なくそれぞれの智と技とスピリットをかわす機会は何にも勝るキャリアアップの機会であり、それは専門職者としての自律性を高めることにつながるといえる。

がん看護学会では、特別関心活動グループ（Japanese Society of Cancer Nursing-Special Interest Group；JSCN-SIG）の組織化を2005年度より開始した。JSCN-SIGの目指すところは、がん看護における特定のテーマに関心を持つ日本がん看護学会会員が集い、情報交換を行って切磋琢磨したり、自己研鑽の場を共有する。それにより自己の専門性を高めるとともに、テーマに関するがん看護の質向上のために貢献するグループの発展が期待できる。今のところ、JSCN-SIGのテーマは14領域（表2）である。JSCN-SIGの活動は、まだ端を発したばかりであり、今年度（2005年）全国3地域（東京、大阪、福岡）において学会主催で説明会が開催され、テーマ別の申し込みが全国各地の学会員から寄せられ、組織化が進められている。

第20回日本がん看護学会学術集会において第1回JSCN-SIG交流フォーラムを開催し（2006年2月12日）、各グループに集ったメンバー間で

具体的な活動方針が討議される予定である。今後、それぞれの専門グループは、規定などの整備をはじめグループの組織化が進み、がん看護専門家として関心テーマにそって独自性を保ちつつ、がん看護発展に向けた機動性と社会的有用性を備えた活動を行っていくことが期待できる。

なお、詳細な情報は日本がん看護学会ホームページ (<http://jscn.umin.jp/method/index.html>) に記載している。

おわりに

がん看護の専門性を持つ看護師が、緩和ケアに貢献できるように、学会としてのこれまでの取り組み、そして今後どのように取り組んでいくかに

ついていくつかの展望を述べた。

緩和ケアは、人々の苦痛からの解放とかけがえない尊い存在としての日々を支えることを目指している。そのために、苦痛・苦悩を和らげるための智や技を高めるために、専門職者が学際的に連携を取り、結集していく必要がある。

一方で忘れてはならないのは、患者の実りある日々を支える家族や周りの人々との連携や協力の中でこそ、専門的な知識や技はより効果的なものになるということである。今後、緩和ケアをより発展していくためには、専門職者の育成のみならず、ホスピスボランティア育成、医療コーディネーター育成などにも関連学会とともに取り組んでいかなければならない。